Don't leave the door open.

S.c

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｏｎ'ｔ　ｌｅａｖｅ　ｔｈｅ　ｄｏｏｒ　ｏｐｅｎ.

【Ｎコード】
Ｎ４５３１Ｍ

【作者名】
Ｓ．ｃ

【あらすじ】
甘い、ラヴストーリーのつもりですｗ
まぁ読んでやってください

「じゃっ、また会えたなら」
「う、うん……」
そこに残ったのは開きっぱなしのドア。
それが三年前、私が高校三年生の時の話だった。

大学に通うようになり、いろいろな諸事情から高校の時から一人暮らしの私は見事にだらしがない生活を送っている。
もともと、三年前親の転勤というやつで一緒に引っ越すようになってはいたのだが転勤先が転勤先でしょ。
『ホンジュラス』
どこだ、そこは？　私が猛烈にいやがったのは必然的だった。別にホンジュラスが悪いというわけではないのだが、生まれ育ったこの町、この国を離れるのがただ怖かっただけかもしれない。その選択は間違っていたのかそれとも正しかったのか……とどまると決めた今、私はここに居て、虚しくありもしない帰りを待っている。三年前の一瞬の邂逅、一時の別れ。共に居た日々は短く、待つ日々は長い。

「私にしてはなかなか感傷的ね」
天音はソファから身を起こしテレビを消した。狭い部屋だけに一気に静かになり隣の部屋の物音がよく聞こえる。
ガチャ……ガチャガチャガチャガチャ
ん？　私の家の玄関から物音がする。早まる鼓動を抑え金属バットに鍋というスタイルで応戦に向かう。
そこに立っていたのは一人の男、いや少年だった。

「よ、代六ヶ木（よろうぎ）……」
「久しぶりだな、天音。ところで何だその格好」
「それはいいとして……な、何で入ってこれるの？　あんたが合鍵持ってっちゃったから一回、いやいや三回は鍵替えたのに」
「ふっ、甘いな暮天音。いつまでたってもあさはかだ……我が眼前に障害など存在しない、あるのはただ愛しい“もの”だけだ」
「何それ？」
　ちょっと期待。
「もちろんアップルパイだ！！」
　はい、分かった。とっとと死んでくれ。っていうか生きてたんだな、三年間一回も連絡してこなかったからてっきり死んだかと。
　それにしても、三年前から雰囲気が変わっていないのはどういうことだろう。『変わらない』というのがプラスなのかマイナスなのか私には分からないけど、代六ヶ木のその目は別れた時と変わらずとても少年らしい光を放っていた。
「あぁ、そうだ天音。この鍵は替えた方が良いな、開けるのに十秒とかからなかった。うむ、そうだな掌紋認証システム、声紋認証システム、十六桁ぐらいの暗証番号があれば万全ではないがこの国ではまず安全だろう」
「覚えられないし。安全性に利便性が駆逐されますって」
「自分だけの情報をパスにすれば強固なカギとなるのだがな。立話もなんだ、上がらせてもらうぞ」
「ちょ、待って。部屋片付けてないし」
「大丈夫だ、気にするな」
　一人暮らしの女子大生宅に上がり込むとは非常識なやつだ。
「……これならこの前の紛争地帯のキャンプの方がよっぽど片付いてたな」
　そういう私も非常識の一人というぐらい自覚しているよ。（……
……えっとなんだっけ扮装痴態？　何その恥ずかしいの。キャンプってそんな変態が集うわけ？）

台風十一号が直撃したような部屋の中をますます散らかすように鍋とバットを置いて、思いついたことから順を追って話していく。ひーちゃん、ユータロー、イギリスに留学したカゴっちのこと。
「……ってなわけでひーちゃんもいろいろ大変なわけよ」
「そうだな奇襲には注意しなければならない。ゲリラ戦法が決められると痛い」
お前はこの三年何をしていた。

「みんな変わっていくんだな」
それにしても、代六ヶ木は感慨深げだ。
「あんたはちっとも変わっていないように見えるけど」
「そうか？　自分なりに変わったとは思ってはいるのだが。髪型とか」
「違う、違う。あの頃は髪型というより着の身着のまま悠々自適、自然回帰主義だったでしょうよ。私は外見的な面じゃなくて、もっと内面的な面のことをいってるの」
「じゃあ、そういう貴様はどうなんだ？　すこしはアップルパイがうまくなったとでもいうのか」
「うぐっ」
急所にクリーンヒット！！
「言っておくがリンゴの小麦粉包み焼きはパイとは呼ばないからな」
「うぐぐっ」
だいたい、それは代六ヶ木がパイ生地から作れって言ったからでしょ。パイシート買ってくればそれですむ話なのに……それがのちにいわれる『暮天音アップルパイ事件（ネームｂｙひーちゃん）』
「貴様が嫌なら別に良いのだぞ。強制してるわけじゃない。ただ貴様の“アップルパイ”が食べたいと思っただけだ」
いやみな野郎だと思う。分かった、作りゃいいんでしょ作りゃ。
あくまで材料はありあわせリンゴも砂糖もバターも小麦粉も『あ

くまで』ありあわせにすぎない食材を取り出した。
「おぉ、よく材料があったな。極秘裏に日本に来ていたのに……もしや、貴様気付いてたのか！？」
どうしてそんな発想になるかな、この大バカ。気付けボケ。そして私に謝れ。

……ばっかみたい。こいつがバカなのか、それともこいつに期待した私がバカだったの？　材料が用意してあったとかしてなかったとか、私のメルヘンチックな考えに普通気付くでしょ。三年、三年ぶりだよ？　高校生のあのときと違うんだしもっと、もっと別のこと話せないのかな？

「じゃあ、ここで待っとくから頼んだ」
「なにを？」
「そりゃ、分かっているだろう。材料があるんだろ？　愛しい”もの”だよ」
……
……

アップルパイがキツネ色に色づき、甘い香りが狭い部屋いっぱいを包む頃。
「むむむ」
すっごい真剣に焼いてみたよ私は。
ご機嫌、ご機嫌。何しろちゃんと焼けたから。はっはーん、やつの狂喜乱舞のしようが目に浮かぶ。
『これ、お前が焼いたのか…』
『そうだけど？』
『最高だ、天音。けっこ……』
妄想タイムしゅーりょー
まずはまず見せるだけ見せてから、盛大に焦らせてやる。

「代六ヶ木、焼けたぞ！　ほら、こんなに……」

ほら、そこに代六ヶ木が居て。今にも飛びかからん勢いで……

居なかった。

残ったのはソファのぬくもりだけ。

「さっきまでそこで携帯を……」

慌てて玄関まで駆け出す。

開け放たれたドア

まるで道化だった。パイがうまく焼けたとたった一人で喜びを振りまく悲しき道化。私に残されたのは走り書きで残された置書き一枚。

『すまん、仕事が入った。もともと今回も長く居れなかったんだ、今度も三年は姿を見せられないだろう。重ね重ね本当にすまない。言いそびれると思うので手紙で悪いがこれだけは言っておく。

じゃっ、また会えたなら。愛しき”者”よ』

（後書き）

某裸研に投稿したものです。知ってる人は知ってるかも

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4531m/

Don't leave the door open.

2010年10月8日14時25分発行